

# モダニズム建築 評価

寄稿 西洋美術館の世界遺産登録

松隈洋

20世紀モダニズム建築を主導したフランスの建築家ル・コルビュジエが日本に唯一残した東京・上野の国立西洋美術館が、世界7カ国、計17件の施設の一つとして、ユネスコ世界遺産に登録されることになった。

なぜ鉄とガラスとコンクリートで造られた現代建築が、法隆寺や清水寺、バルテノン神殿やアルハ

ンブラ宮殿と肩を並べる世界遺産となったのか、不思議に思うかも知れない。しかし今回の登録は、私たちの身近な生活空間そのものを形作ってきたモダニズム建築の価値が認められた、画期的な出来事として記憶されるに違いない。登録理由とされたのは、コルビ



まつくま・ひろし 1957年兵庫県生まれ。前川国男建築設計事務所を経て、京都工芸繊維大教授。専門は近代建築史、建築設計論。著書に「残すべき建築」など。



国立西洋美術館本館

## 生活空間の理想型追求

ユジエがモダニズム建築運動の中で果たした先駆的役割という観点だった。選り出された17件の内訳は、住宅と集合住宅が11件。それ以外は文化施設2件、宗教施設2件、工場1件、都市計画1件だけだ。このことは何を意味するのだろうか。

これらの建物が生み出される背景にあったのは、産業革命以降に起きた都市への急激な人口集中による生活環境の劣悪化のほか、戦争や自然災害による住宅不足という深刻な社会問題だった。

そこでコルビュジエは当時、急速に進歩を遂げつつあった工業技術を推進力として、生活空間の抜本的な改善を図ろうとした。その

ために建築を工業化し、量産化された材料や鉄筋コンクリートを用いた新しい建設システムを開発したのだ。

こうして「人間のための建築」を目標に掲げたモダニズム建築運動が、世界的に展開した。それは、資本や権力の集中によって建てられていた従来の記念碑のような建築ではなく、社会の経済的な状況に見合う、誰もが健康で快適に暮らすことのできる、合理的で機能的な生活空間を実現しようとする取り組みだった。

独学で建築を学んだコルビュジエは、過去から学び取るこの大切さにも気づいていた。だから、このことを誰もが共有できる建築として美術館に着目し、その理想型を追求し続けたのだろう。

いくつも手掛けた美術館の中から、今回は国立西洋美術館が選ばれた。それは日本の弟子3人と達した完成度の高さが一因ではないのか。坂倉準三、前川国男、吉阪隆正が実施設計と現場監理に協力し、日本の職人の技が注ぎ込まれる中、コルビュジエが日本の自然や伝統に学んだ独自の造形を試みた結果だろう。登録を機に、彼の求めた建築の原点を見つめ直しておきたい。



コルビュジエが残したフランス、マルセイユのユニテ・ダビタシオン(下田泰也氏撮影・文化庁提供)

東京都二三区の中で最多となる約九〇万人が暮らす世田谷区では、ここ数年、区庁舎の建替えをめぐる議論が続いている。竣工から半世紀が経過し、老朽化と耐震性への不安から、全面建替えを求め声が高まっているからだ。しかし、隣接する区民会館と共に前川國男が手がけ、広場を中心とする郊外型公共施設のあり方を先駆的に示した好例として評価も高い。このため、日本建築学会や日本建築家協会などから保存要望書が相繼いで出されてきた。そこでここでは、この建物に込められたものとは何かについて振り返っておきたい。

この区民会館と区庁舎は、一九五七年に行われた日建設計、佐藤武夫、山下寿郎、前川國男の四者による区庁舎として初の指名設計競技によって前川案が選ばれて建設された。前川の下で設計を担当した鬼頭梓の記した次の文章からは、東京が直面していた都市の現実が浮かび上がってくる。

「東京が巨大な村落であるといわれているように、それは一つの都会としての有機的な内容を失ってしまった。都心が、密集する高層ビルと自動車の氾濫によって、その機能が麻痺し始めている時に、その郊外の住宅地は、平面的に無限に拡がりながら、小さな庭と小さな木造住宅によって埋めつくされようとしている。(中略)その中で人々は狭い殻に閉じこもって、孤独の生活を細々と守っている。このように無数の矛盾をはらみながら、しかも今の東京には未だ健康な幸福な都会生活へのイメージすら存在していない。そこには、そのようなイメージを育てるような共通の意識、連帯感がそもそも存在していない(中略)このよ

人々の幸福に連なる善の公共施設の設計を委嘱されたとき、私たちは強い意欲をいだくと同時に、何を手掛りとしてこの設計を進めていったらよいかに苦しんだ。」(鬼頭梓「区民会館の設計で考えたこと」『建築文化』一九五八年六月号)

この文章にあるように、高度経済成長期に突入した当時の東京では、人口集中が急速に進み、通勤ラッシュや交通渋滞といった軋みが始まっていた。そんな中、身近

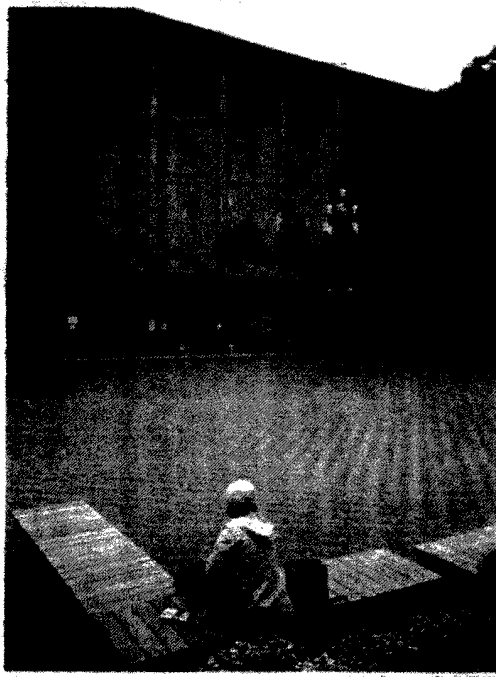
頭は、竣工後、この建物で何を目指したのかについて、次のように記したのである。

「親しみやすい空間を創りたい。ちょうど四年前、はじめてこの設計に手をつけ、最初思ったことであった。(中略)前面道路から裏側まで連なる広場、その中途におかれたピロティの右に庁舎、左に区民会館の入口という配置は、いわば、道路に囲まれた広場の一隅にホワイエ、一隅に役所のカウンターをおくといった気持ち

## 記憶の建築

松隈 洋

世田谷区民会館・区庁舎 1959・60年  
都市のコアに託された情景



ある日の広場の情景

ことが、いかにも大切なことにおもえてくるのである。」(鬼頭梓「配置計画のことなど」『建築文化』一九六二年五月号)

こうして、区の樹木である榎の植えられた前面道路側の前庭から、二階建ての公民館の下に設けられたピロティをくぐると、折板構造のコンクリート開放の荒々しい表情の外壁を背景に中庭的な広場がひろがる独特な外部空間の構成が生み出された。また、公民館には水平に伸びる大きな庇が設けられ、建物の周囲には区庁舎も含めてバルコニーや外部階段も廻らされて、回遊性のある公共空間が創り出されている。さらに、当時の職人たちの手仕事の跡を如実に映し出すコンクリートで空間のすべてを造ることによって、骨格の逞しさと素朴な表情を持つ建築が目指されたのである。

そして、この建物には、前川が一九五一年に丹下健三や吉阪隆正らと参加して師のル・コルビュジエとの再会を果たした、ロンドンで開催された第八回近代建築国際会議(CIAS)の「都市のコア」というテーマも盛り込まれていた。すなわち、合理的で機能的な近代建築の追求だけでは居心地の良い都市は実現できず、そこに核となる広場的な公共空間を組み込むことが必要であるという視点を前川は日本へ持ち帰り、自ら実践しようとしたのである。

時は流れ、心のよりどころとなる親しみやすい空間を切望した人々とそれに応えようと努力した設計者の思いは忘れ去られてしまった。それでも、ここからは公共性とは何かに応える質が今も発信されている。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士(工学)  
一九五七年兵庫理学院生まれ、一九八〇年  
都立大学卒業後、前川國男建築設計事務所  
に入所、二〇〇八年十月より現職

な場所の心のよりどころとなる公共的な空間が切望されたのだろう。敷地は松陰神社や豪徳寺に程近い閑静な住宅地の一角にある。ここに地域の核となる集会所や展示室、結婚式場などからなる公会堂と、一三〇〇人を収容する本格的な舞台を持つ劇場、区庁舎が計画された。また、実は、敷地の大半はある一人の地主からの寄贈であり、建設費も地元民の寄付金を元に地道な積み立てによって賄われたという。だからこそ、こうした時代背景と人々の期待を前に、鬼

だった。(中略)市民の生活の場に連なる空間を主体として考え、その空間を創り出すものとして区民会館と区庁舎が置かれたといつてもよいと思う。道路がひろがり、ふくれあがり、のびていって広場となり、また道路へと連なってゆく。二つの建物とピロティによってつくられ、榎と灌木に囲まれ、ベンチのおかれたその広場を、人々は通り抜け、吹き溜りのようにあちこちに溜り、子供は遊びまわる。区役所や区民会館に来る人々と、直接関係のないこんな

